



鳥羽離宮跡公園 秋ノ山

鳥羽作道

鳥羽作道は平安京の造営に伴い、羅城門からまっすぐ南へ造られた道です。平安時代は難波からの外国人使節の入京路で、物資の輸送路でもあり、鳥羽離宮造営時には行幸路であったと考えられています。現在は、羅城門跡石碑が建つ花園児童公園のある九条通から南下する千本通が、その作道と想定されます。平安京の玄関口であった羅城門付近から千本通を歩き、周辺の見所をご紹介します。鳥羽離宮跡へご案内します。



恋塚と僧文覚

上鳥羽の浄禅寺と下鳥羽の恋塚寺に「恋塚」と呼ばれる石塔があります。これらの塚は両寺の開基となった文覚の逸話を伝えています。寺伝では北面の武士だった遠藤盛遠が同僚の妻・袈裟御前(けさごぜん)に横恋慕し、誤って殺してしまうことで出家したとされています。後に文覚は源頼朝の知遇を得て、頼朝や後白河法皇の庇護の下、神護寺、東寺ほか多くの寺院の復興に貢献します。

浄禅寺

平安時代、文覚が開基。山門横に「恋塚」があり、境内の地蔵尊は「鳥羽地蔵」と俗称され、「六地藏めぐり」の一つとして知られています。

恋塚寺

所在地：伏見区下鳥羽城ノ越町

浄禅寺と共に「恋塚」があります。袈裟御前の肖像画等を所蔵しています。

鳥羽離宮 ～院政の舞台～

平安時代後期、院政の地として鳥羽離宮には広大な敷地に大規模な池泉庭園を持つ御所と御堂が建ち並んでいました。

1 鳥羽離宮跡公園 (国指定史跡 鳥羽殿跡)

鳥羽離宮南殿跡を整備した公園です。園内にある「秋ノ山」は、南殿庭園の築山の遺構です。

2 城南宮

平安京遷都の際、都の南を護る神社として創建されたと伝わります。離宮造営後はその鎮守社として栄えました。神苑「楽水苑」は、昭和の造園家・中根金作が作庭した春の山・平安の庭・室町の庭・桃山の庭・城南離宮の庭で構成され、雅の世界を見せています。

羅城門と東寺・西寺 ～都への玄関口～

1 教王護国寺(東寺) 世界遺産

平安京遷都の際創建。平安京の二大官寺の一つでしたが、後に空海に下賜され真言密教の道場として発展しました。現在の建物は後世のものですが、伽藍の配置は造営当初のままです。1644年、徳川家光の奇進で再建された五重塔(国宝)は高さ55mと国内古塔では最高です。

2 羅城門遺址

平安京の朱雀大路南端に建てられた二層の大門跡です。816年に大風で倒壊、再建されましたが980年にも暴風雨で損傷し、以後修理されず姿を消しました。

3 西寺跡 (国指定史跡)

西寺は度重なる火災で消失、1233年の焼亡以降再建されなくなりました。1921年、唐橋西寺公園内の講堂基壇跡に「史蹟西寺跡」の石碑が建てられました。

吉祥院 ～菅原道真誕生地～

吉祥院天満宮

社伝に、934年朱雀(すさく)天皇が自ら道真像を彫って社殿を建て安置したのが始まりとされています。毎年春・夏の祭りには、境内の舞楽殿で吉祥院六斎念仏(国指定重要無形民俗文化財)が奉納されます。

菅公抱衣塚

菅原道真の「抱衣塚」があり、へそを象徴した丸石が置かれています。

吉祥天女社

菅原氏守護の本尊として創建。地名の由来になったとされています。

吉祥院周辺 ～菅原道真ゆかりの地～

1 菅丞相視之水

道真幼少の頃、勉学等に用いたとされる井戸の跡とされています。

2 六田の杜

社伝によれば、道真のために姓に「田」がつく六家が社を築いたとされる旧跡です。

3 三善院

道真が彫ったとされる十一面観世音像を天女堂に祀っています。

4 北政所墓所

道真夫人の墓と伝わります。

5 菅原是善卿墓 (香泉寺内)

道真の父是善の墓とされています。(一般参拝不可)

6 菅原清公御墳墓

道真の祖父清公の墓とされています。

鳥羽離宮跡公園 周辺

3 白河天皇 成菩提院陵

白河天皇が建立した三重塔の下に、崩御後埋葬されました。現在、塔は残されていません。

4 北向山不動院

鳥羽天皇の勅願により鳥羽離宮内に創建。本尊の不動明王像(重要文化財)は王城鎮護のため北向きに安置されています。

5 鳥羽天皇 安楽寿院陵

鳥羽天皇が白河天皇に倣って三重塔を建立し、そこに埋葬されました。現在は後に建てられた法華堂があります。

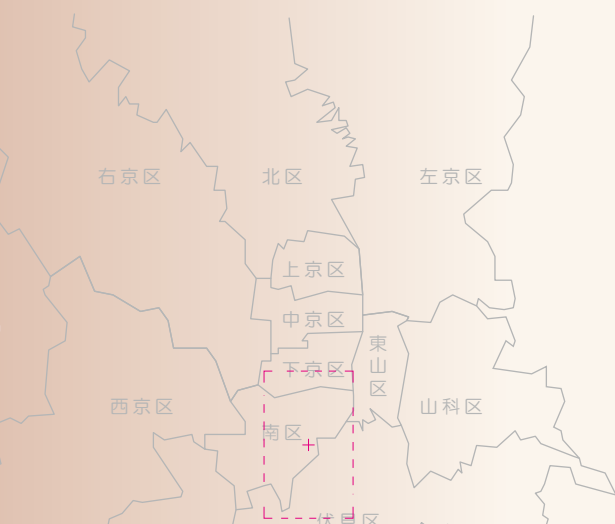
6 安楽寿院

鳥羽天皇により創建。現存する建物は江戸時代以降に再建されたものです。境内が市指定史跡となっています。

7 近衛天皇 安楽寿院南陵

日本で唯一多宝塔が現存する天皇陵です。現在の塔は1606年豊臣秀頼の奇進により再建されたものです。

鳥羽作道



～文化財と遺跡を歩く～ 京都歴史散策マップ



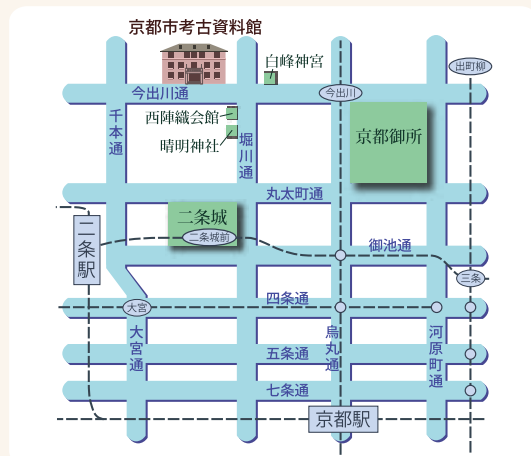
発行 京都市・(財)京都市埋蔵文化財研究所



京都市考古資料館

大正3年に本野精吾の設計で建てられた旧西陣織物館を内部改修し、京都市内の発掘調査・研究の業績を発表・展示するため昭和54年11月に設立されました。特別展と常設展で構成され、約1000点の遺物が展示されています。遺物展示のほかにも、映像やパソコンで旧石器時代から近世にかけての京都の歴史を学ぶことができます。建物は、昭和59年に京都市有形文化財に登録されています。

〒602-8435
京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265-1
TEL. 075-432-3245 FAX. 075-431-3307
http://www.kyoto-arc.or.jp/museum/
入館無料・月曜休館(月曜が祝日の場合は翌日)
開館時間 9:00～17:00(入館は16:30まで)
JR京都駅より地下鉄烏丸線 今出川駅下車徒歩15分
市バス201・203・59系統 今出川大宮下車すぐ



鳥羽作道周辺の発掘調査

鳥羽作道は平安京造営に際し、羅城門から一直線に南行する計画的に造られた道路です。平安時代後期には鳥羽の地に鳥羽離宮が造営され、離宮への主要道となりました。中世から近世にかけては、当初幅九丈(約27m)といわれた広い道幅もいつしか狭くなっていきましたが、道の重要性は変わらず、鳥羽から淀川沿いに大坂(阪)へ通じ、京都へ人や物資の搬入路として京街道、大坂街道とも呼ばれました。周辺の発掘調査には、作道の出発点の羅城門を挟み東寺や西寺の調査が行われています。東寺では近年、築地塀の解体修理に伴う発掘調査が行われています。また、主要伽藍の北側では、鎌倉時代に建てられた東寺子院跡の発掘調査も行われ、子院の様子も分かってきています。西寺では1959年から本格的な発掘調査が開始され、建物の配置や規模が明らかになってきています。羅城門からまっすぐ3km程行けば、鳥羽離宮跡に至ります。ここでの発掘調査は、鳥羽離宮跡や離宮造営以前の遺跡である鳥羽遺跡、下鳥羽遺跡の発掘調査も行われ、弥生時代から古墳時代の竪穴住居や古墳の溝跡、弥生土器などが発見され、この地の歴史的な変遷も分かってきています。

45 鳥羽離宮跡

鳥羽離宮跡の最初の発掘調査は、昭和35年(1960)の名神京都南インター建設に伴う発掘調査です。その後、これまでに140回を超える調査が行われ、平安時代後期、白河上皇が応徳三年(1086)に造営を開始し、鳥羽天皇によって約70年間造営が続いた離宮の殿舎・御堂・庭園等の様子が明らかになりました。現在、その様子を示す遺構は多いとはいえませんが、東殿の安楽寿院や北向山不動院、馬場殿跡と想定される城南宮、白河・鳥羽・近衛の各天皇陵が現存しています。

4



最初の調査(名神京都南インター予定地)

5



御堂の一つである金剛心院釈迦堂跡



金剛心院阿弥陀堂跡から出土した装飾金具

1 教王護国寺(東寺)旧境内

「弘法さん」として親しまれている東寺は西寺とともに平安京内に造られた官寺で、延暦十五年(796)に造営が開始されました。正式名称は「教王護国寺」で、国の史跡に指定され、世界遺産にも登録されています。寺域は当初は八町を有し、北側の四町は政所院などの寺院経営にかかわる区域で、南の四町に主要伽藍が建立されました。境内ではこれまでに多くの発掘調査が行われ、金堂や講堂など主要な建物は、再建されたものですが、その位置は建立された時とほとんど変わっていないことが明らかになっています。2010年から築地塀の解体修理に伴う発掘調査が行われ、平安時代から江戸時代の築地塀構築のための積土の様子が明らかに、東築地塀の位置も造営当初から現在まで全く変わっていないことが分かりました。



上空から見た現在の東寺境内



現在の東築地塀



東築地塀を横断しておこなわれた調査



東築地塀本体の調査



東築地塀の断面

67 鳥羽遺跡

鳥羽離宮跡の下層にある弥生時代から古墳時代を中心とした遺跡です。1981年の発掘調査で、初めて弥生時代中期の土器が溝から出土し、それ以後の調査で弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡や溝、土器などが多数見つかリ、「鳥羽遺跡」として呼称されるようになりました。これまでの発掘調査では、古墳時代の竪穴住居や古墳が発見されています。

6



竪穴住居跡(古墳時代)



古墳の周溝跡



周溝から見つかった人物埴輪



竪穴住居跡(古墳時代)

8 下鳥羽遺跡

鳥羽遺跡の南方に位置する下鳥羽遺跡は、弥生時代から古墳時代の集落遺跡です。京都市域では、数少ない弥生時代前期の遺構と遺物が出土する遺跡です。また、鳥羽遺跡とともに、一帯に広がる古墳時代の遺跡としても周知されています。1987年、下鳥羽公園南の発掘調査で弥生時代前期から古墳時代の水路跡や建物跡を発見しました。とくに弥生土器と縄文時代晩期終末の土器が同一の穴から出土し注目されました。



発掘調査の様子



住居跡(弥生時代)



出土した土器 1～4は弥生土器 5・6は縄文土器

2 東寺子院跡

東寺の主要伽藍の北側には、鎌倉時代から子院が形成され始めます。その後、中・近世を通じて、大小多くの子院が建てられたことが、各種の史料や絵図等から窺い知ることが出来ます。ここには、現在も観智院や宝菩提院などの子院が軒を連ねており、往時の様相を今に伝えています。東寺北側の東にあたる洛南会館新築工事に伴う1988年の発掘調査や東寺の北側の西に隣接する洛南高等学校の校舎建て替えに伴う2001年の発掘調査では、室町時代から江戸時代の子院の地割りを示す溝跡、建物跡やそれらを囲む堀跡などが発見されています。また、2009年東寺の北側東にあたる保育園改築に伴う発掘調査では子院の区画溝や建物跡が発見され、講堂跡から出土した平安時代のものと同文の緑釉軒丸瓦も見つかっています。



東寺北東部の調査の様子



東寺子院の溝跡や建物跡



東寺子院の建物跡と出土した緑釉軒丸瓦

3 西寺跡

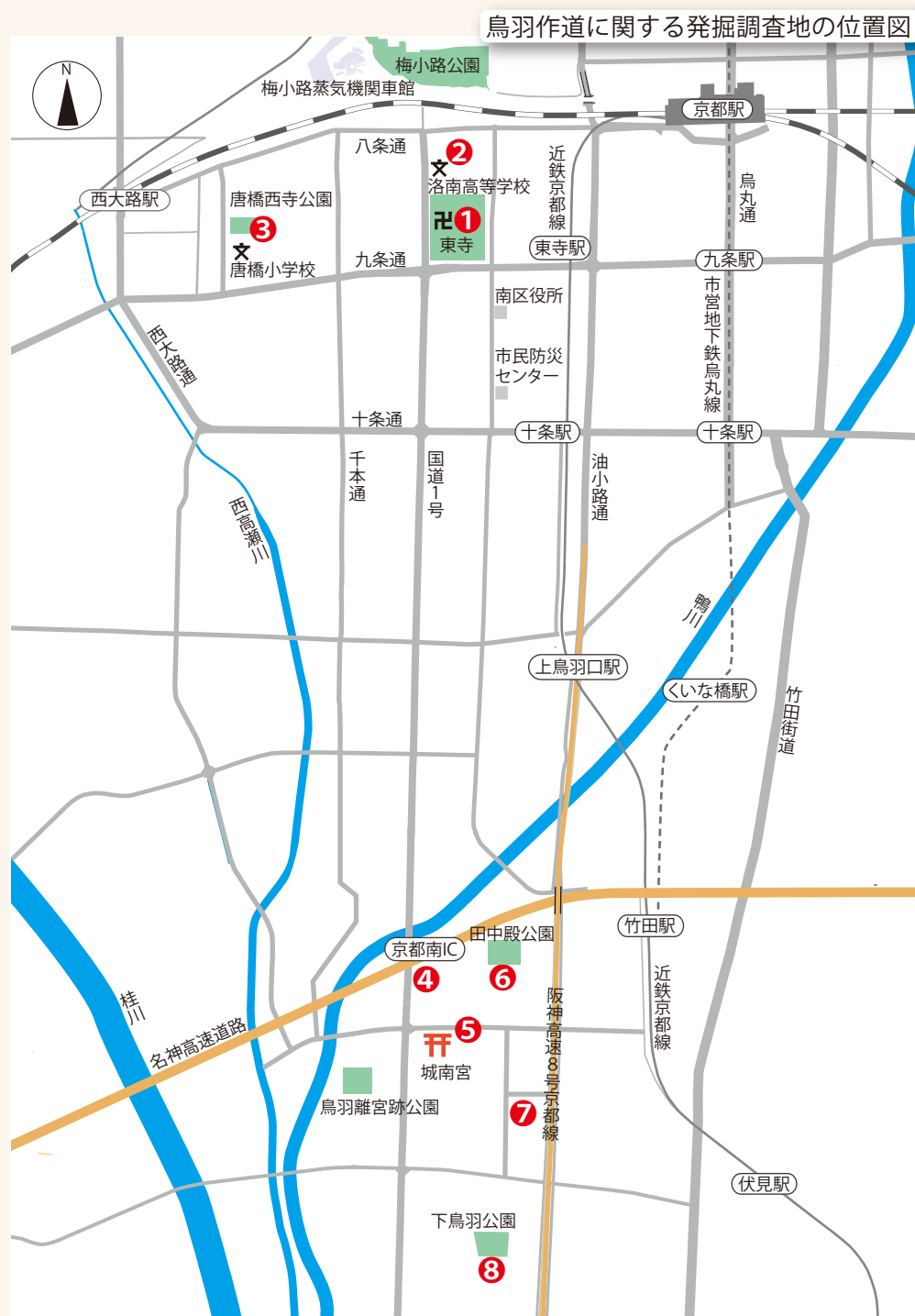
平安京の朱雀大路を挟んで東寺と対称に建立された官寺です。現在、唐橋西寺公園内に講堂跡を示す土壇と礎石が残されています。1921年に、土壇の周辺地が国の史跡「西寺跡」に指定されました。1959年から本格的な発掘調査が開始され、学校や周辺の住宅地の建て替え工事に伴い、南大門や中門、金堂、東・西僧坊、東・西回廊等が発見され、1966年には史跡範囲も拡大されました。東寺は今日までその位置を変えずに伽藍を維持していますが、西寺は正暦元年(990)の焼亡により大部分が失われ、ある程度は再建されましたが、天福元年(1233)の火災で焼け、その後は再建されませんでした。



上空から見た西寺跡



伽藍北側の礎石建物跡



資料提供：財団法人京都市埋蔵文化財研究所